

エジプト学研究第 22 号 2016 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.22, 2016

目次

〈序文〉	吉村作治	3
〈調査報告〉		
2015 年 太陽の船プロジェクト 活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	5
第 23 次アブ・シール南丘陵遺跡調査概報	吉村作治・河合 望・近藤二郎・高宮いづみ・高橋寿光・竹野内恵太・山崎美奈子・福田莉紗	15
第 24 次アブ・シール南丘陵遺跡調査概報	吉村作治・河合 望・近藤二郎・高宮いづみ・柏木裕之・高橋寿光・米山由夏・松永修平・山崎世理愛	29
アブ・シール南丘陵遺跡第 23 次・第 24 次調査保存修復作業	苅谷浩子・柏木裕之・高橋寿光・河合 望・吉村作治	41
第 12 次アブ・シール南丘陵遺跡調査において出土した集団埋葬墓人骨の人類学的分析（予報）	坂上和弘・馬場悠男・平田和明	51
非破壊オンサイト蛍光 X 線分析によるアブ・シール南丘陵遺跡集団埋葬墓出土遺物の化学的特性化	阿部善也・大越あや・内沼美弥・扇谷依李	69
エジプト ダハシュール北遺跡調査報告—第 22 次調査—	吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・柏木裕之・竹野内恵太・山崎世理愛	91
第 8 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報	近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合 望・高橋寿光・竹野内恵太・福田莉紗	113
〈論文〉		
エジプト先王朝時代ネケンにおける石製容器の穿孔法—石器使用痕観察と穿孔実験からの推定—	長屋憲慶	149
〈研究ノート〉		
古代エジプトの親族名称研究の現状と課題	齋藤久美子	167
画像資料からみたエジプト中王国時代の装身具研究序論	山崎世理愛	179
〈動向〉		
埃及学指南のための覚書	河合 望	205
〈活動報告〉		
2015 年度 日本エジプト学会活動報告		229
2015 年 エジプト調査		233

The Journal of Egyptian Studies Vol.22, 2016

CONTENTS

Preface	Sakuji YOSHIMURA.....	3
Field Reports		
Report of the Activity in 2015, Project of the Solar Boat	Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA.....	5
Preliminary Report on the Twenty-Third Season of the Waseda University Excavations at Northwest Saqqara, 2014	Sakuji YOSHIMURA, Nozomu KAWAI, Jiro KONDO, Izumi TAKAMIYA, Kazumitsu TAKAHASHI, Keita TAKENOUCI, Minako YAMASAKI and Risa FUKUDA.....	15
Preliminary Report on the Twenty-Fourth Season of the Waseda University Excavations at Northwest Saqqara, 2015	Sakuji YOSHIMURA, Nozomu KAWAI, Jiro KONDO, Izumi TAKAMIYA, Hiroyuki KASHIWAGI, Kazumitsu TAKAHASHI, Yuka YONEYAMA, Shuhei MATSUNAGA and Seria YAMAZAKI	27
Preliminary Report on the Conservation Work at North-West Saqqara in 2014 and 2015 Seasons	Hiroko KARIYA, Hiroyuki KASHIWAGI, Kazumitsu TAKAHASHI, Nozomu KAWAI and Sakuji YOSHIMURA	41
Report on the Study of Human Skeletal Remains from the Multiple Burial in Northwest Saqqara, Egypt -Preliminary report-	Kazuhiro SAKAUE, Hisao BABA and Kazuaki HIRATA.....	51
Chemical Characterization of Artifacts Excavated from an Intact Multiple Burial at Northwest Saqqara by Nondestructive Onsite X-ray Fluorescence Analysis	Yoshinari ABE, Aya OKOSHI, Miya UCHINUMA and Eri OGIDANI.....	69
Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Twenty-Second Season	Sakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI, Keita TAKENOUCI and Seria YAMAZAKI.....	91
Preliminary Report on the Eighth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition	Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Takao KIKUCHI, Hiroyuki KASHIWAGI Nozomu KAWAI, Kazumitsu TAKAHASHI, Keita TAKENOUCI and Risa FUKUDA.....	113
Articles		
Stone Vessel Drilling Method at Predynastic Nekhen, Hierakonpolis: Perspectives from Use-wear Trace Analysis and Experimental Drilling.	Kazuyoshi NAGAYA	149
Current Status and Issues of Kinship Terminology in Ancient Egypt	Kumiko SAITO	167
Introduction to a Study on Personal Adornments of the Middle Kingdom in Ancient Egypt through the Iconographic Analysis	Seria YAMAZAKI.....	179
Note on the current research tools for Egyptology.....	Nozomu KAWAI.....	205
Activities of the Society, 2015-16.....		229
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2015.....		233

調査報告

エジプト ダハシユール北遺跡調査報告 —第 22 次調査—

吉村 作治*¹・矢澤 健*²・近藤 二郎*³・柏木 裕之*⁴
竹野内 恵太*⁵・山崎 世理愛*⁶

Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Twenty-Second Season

Sakuji YOSHIMURA*¹, Ken YAZAWA*², Jiro KONDO*³, Hiroyuki KASHIWAGI*⁴,
Keita TAKENOUCHI*⁵, Seria YAMAZAKI*⁶

Abstract

The joint expedition of Higashi Nippon International University and Waseda University, under the direction of Prof. Dr. Sakuji Yoshimura and Ken Yazawa as a field director, conducted an excavation work at Dahshur North from April 22nd to May 14th in 2015. In this season the area between the New Kingdom tomb-chapels of Ipay and Ta was investigated (Fig.1). The area measures 20 m x 20 m, and at the center a small mound has been observed. Soon after removing surface sand, a part of mud brick enclosure wall, approximately 9.1 m (north-south) x 16.8 m (east-west) was revealed. Almost at the center of the enclosure there was a shaft with subterranean chambers (Shaft 125). Three chambers were found to the west and one to the east (Figs.2, 5, 6). Vast amount of wooden shabtis, shabti boxes, fragments of wooden coffins, lids of canopic jar, scarabs, beads and pot-shards were retrieved. The date of objects from subterranean chamber ranges from the Nineteenth to Twentieth Dynasty. It is noteworthy that most of objects, including coffin, shabtis, canopic jars and their boxes show a similar decoration style, the outer surface was covered by black resin and decorated with yellow pigment. Similar 'black and yellow' funerary assemblage was observed in the burial of Shaft 110 in this site, which was assigned to the Twentieth Dynasty. Black type coffins of the late Ramesside Period were also found in the tomb of *Iurudef* in Saqqara. Since this type of funerary assemblage was not attested in Thebes and the other regions in the Ramesside Period, our discovery indicates that the funerary custom peculiar to the Memphite region existed in the late New Kingdom.

1. はじめに

早稲田大学エジプト学研究所によるダハシユール北遺跡の調査隊は、1995 年の新王国時代第 18 王朝末の人物「王の書記イパイ」のトゥーム・チャペル（神殿型平地墓）の発見を皮切りに、「パシエドゥ」、「タ」のトゥー

* 1 東日本国際大学学長 / 早稲田大学名誉教授
* 2 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員准教授
* 3 早稲田大学文学学術院教授 / 早稲田大学エジプト学研究所所長
* 4 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授
* 5 早稲田大学大学院文学研究科博士課程
* 6 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

* 1 *President, Higashi-Nippon International University/ Professor Emeritus, Waseda University*
* 2 *Visiting Associate Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashi-Nippon International University*
* 3 *Professor, Faculty of Letters, Arts, and Sciences, Waseda University / Director, Institute of Egyptology, Waseda University*
* 4 *Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*
* 5 *Doctoral Student, Department of Archaeology, Waseda University*
* 6 *MA Student, Department of Archaeology, Waseda University*

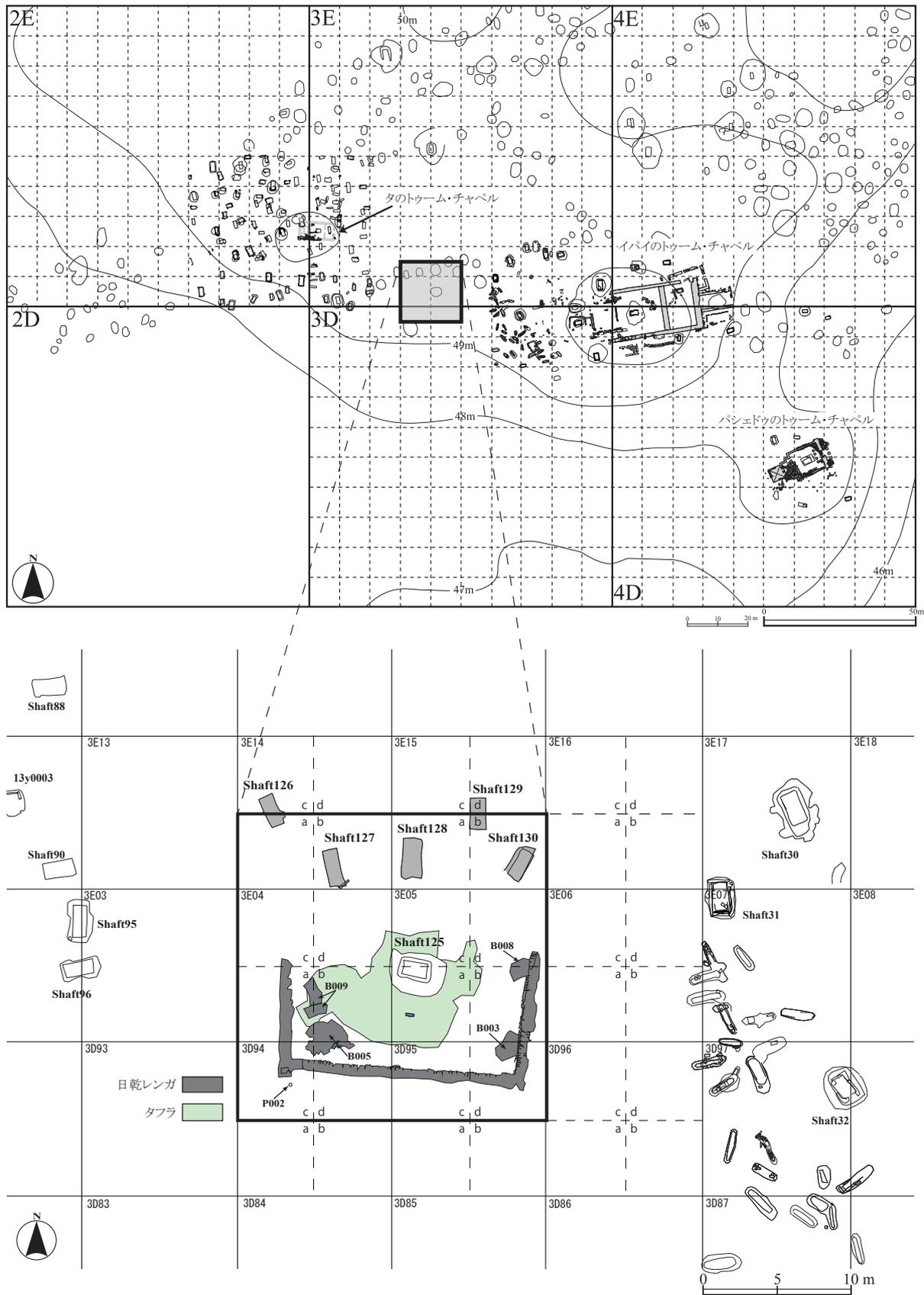


図1 ダハシュール北遺跡地図と発掘区
Fig.1 Map of Dahshur North and excavated area

ム・チャペルとその周辺に点在する数々の新王国時代の墓を発見してきた。2004 年以降は「タ」のトゥーム・チャペルとその周辺に広がるシャフト墓、土壌墓の調査を実施し、中王国時代と新王国時代の未盗掘墓が複数発見されるに至った。「タ」周辺の調査成果から、この遺跡は新王国時代だけでなく、中王国時代の墓も数多く存在することが分かってきた¹⁾。

2014 年度からは日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究 (A)「葬制から見た古代エジプト文明の変化とその社会的背景に関する学際的研究」(研究代表者: 吉村作治)の一環で、東日本国際大学エジプト考古学研究所と早稲田大学エジプト学研究所によるダハシュール北遺跡の埋葬を対象とした研究が行われている。当該研究課題でのダハシュール北遺跡発掘は第 22 次調査が最初であり、2015 年 4 月 23 日～5 月 14 日に実施された²⁾。「イパイ」墓周辺と「タ」墓周辺では、墓の年代や長軸の方向、規模、中王国時代の墓の有無などで傾向に違いがあり、こうした関係を整理するための資料取得を期待して、第 22 次調査では「イパイ」墓と「タ」墓の間に発掘区が設定された(図 1)。発掘区の中央にはやや小高くなった地点があり、調査の結果、シャフトを中心にタフラと赤褐色の地山由来の掘削廃土が堆積し、その周囲にコの字状の平面を呈する日乾煉瓦の壁体が築かれた遺構が発見された(シャフト 125)。第 22 次調査の作業はこのシャフト 125 の地上部および地下室の発掘と出土遺物整理が主となった。本稿はその成果の概要報告である。

2. 地上部の発掘調査

第 22 次調査では過去のイパイ墓周辺発掘区とタ墓周辺発掘区の間に位置する 20 m x 20 m の地区(グリッド 3E14-a および b、3E15-a および b、3E04、3E05、3D94-c および d、3D95-c および d)の地上部の発掘から開始された。表層を取り除くと、南北 9.1 m、東西 16.8 m の平面がコの字形を呈する日乾煉瓦の壁体が発見された(図 2)。壁体は北側だけでなく、地山面まで砂層を除去したが、その痕跡も発見できなかった。壁体の幅は 52 cm で、日乾煉瓦の摩耗が激しく、一番残存しているところで 3 段だった。煉瓦のサイズには統一性がなく、砂層の上に空積みで築かれており、トゥーム・チャペルのような高い壁体を想定して築かれたものではないと考えられる。壁体の内側からはシャフトが発見された(シャフト 125)。シャフトの開口部平面の長軸は東西方向であり、東、西、南側の壁体からシャフト開口部までの距離はほぼ等しいことから、壁体はこのシャフト 125 に付属していると考えられる。シャフト開口部の周囲、特に南側は岩盤の掘削廃土であるタフラが堆積しており、その下に地山の掘削廃土である礫を多く含む赤褐色の層が広がっていた。

壁体の内側には、日乾煉瓦が集中して出土した箇所があった(図 1、B003、B005、B008、B009)。西側の B005、B009 は土壌になっており、内部には日乾煉瓦が不規則に入れられていた。日乾煉瓦にはイパイのトゥーム・チャペルで発見された煉瓦のスタンプ(吉村他 1998: 115, 図 7.1)と同じものが押されている日乾煉瓦が発見されており、煉瓦の一部はイパイ墓のものが再利用されていたことが分かった。これら 2 つの集中箇所からは土器が出土しており、B005 からは石灰岩製のステラが出土した。

日乾煉瓦の集中部分から出土した土器の代表的な器形としては、B005 から出土したミニチュアの碗形(図 3.1-4、全て Nile B2³⁾)、小型のピーカー形(図 3.5)と B009 から出土したマールクレイのアンフォラ(図 3.7)がある。D. アストンのアンフォラの研究による分類では Type B1 に該当し、このタイプは時代が新しくなるにつれより細長い形状になっていく。中でも新王国時代第 18 王朝後期から第 19 王朝初期(ラムセス 2 世治世まで)のものが、最も類似している(Aston 2004: 187-191, Fig.7)。ステラ(図 4)は頂部が丸く、沈み浮彫によって描かれた 2 段の場面構成となっており、最上部にはウジャトの眼の間にシェン(*sn*)の輪が描かれている。上段は左側に座しているオシリス、右側にはオシリスに向かって礼拝のポーズをとった人物が描かれ、その間に積み上げられた供物が配されている。下段は椅子に腰かけた 2 組の男女が向かい合う形に

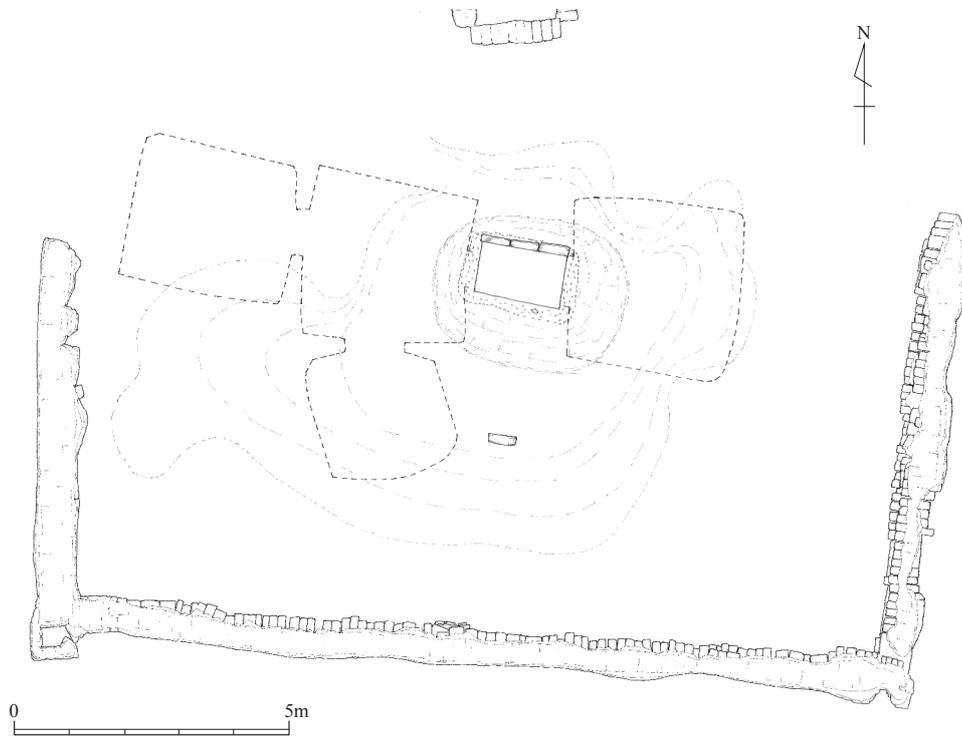


図2 シャフト 125 地上部 日乾燥瓦壁体
Fig.2 Mudbrick wall of Shaft 125

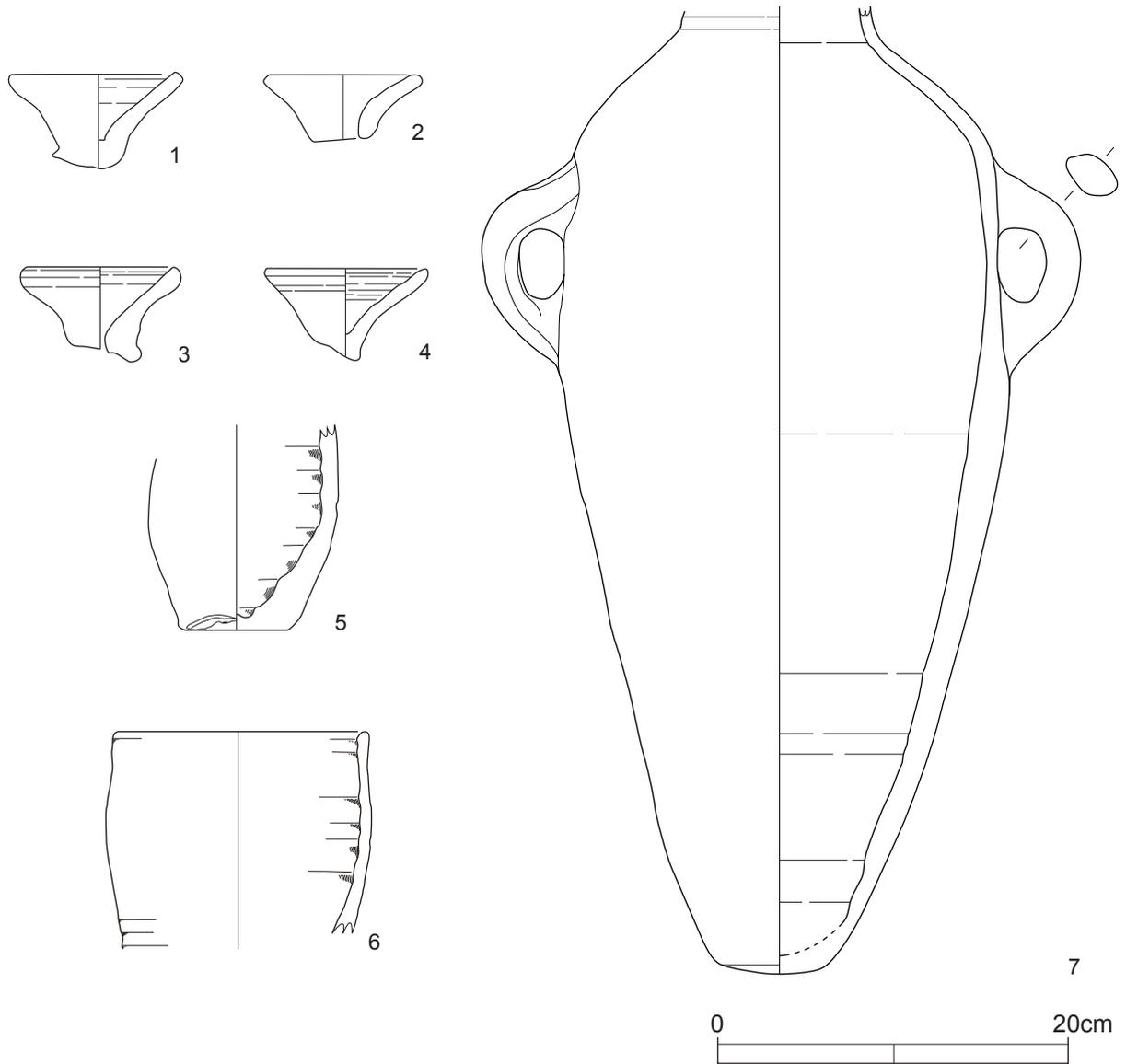


図3 シャフト 125 地上部出土土器
Fig.3 Pottery vessels found at the above-ground area of Shaft 125

なっており、その間に供物が描かれている。人物の頭頂には香が載せられている。下段の女性の称号が *nbt pr* 「家の女主人」であることは読み取れるが、人物の名前については表面の摩耗のため判別できなかった。同様の場面構成を持つステラはアメンヘテプ 3 世治世に類例が認められる (Bresciani 1985: 60-61)。

日乾煉瓦が集中する土壇の用途は明確ではない。土壇からステラが出土しているが、埋葬された人骨などは一切認められなかった。土壇はシャフト 125 に由来すると考えられるタフラの堆積を切っているため、シャフト 125 よりも後に掘られたものと考えられる。後述するようにシャフト 125 はステラや土器の年代よりも新しい遺構なので、イパイ墓由来の日乾煉瓦と同様、土器やステラは本来この遺構に関連するものではなく、別の遺構からもたらされた可能性が高い。

壁体南西コーナー部の南側から径約 30 cm の円形の浅い土壇が発見された。内部からは土器片と不整形の石灰岩片が出土した。位置関係から見て、定礎の儀式に関連した遺構である可能性が考えられる。アンフォ

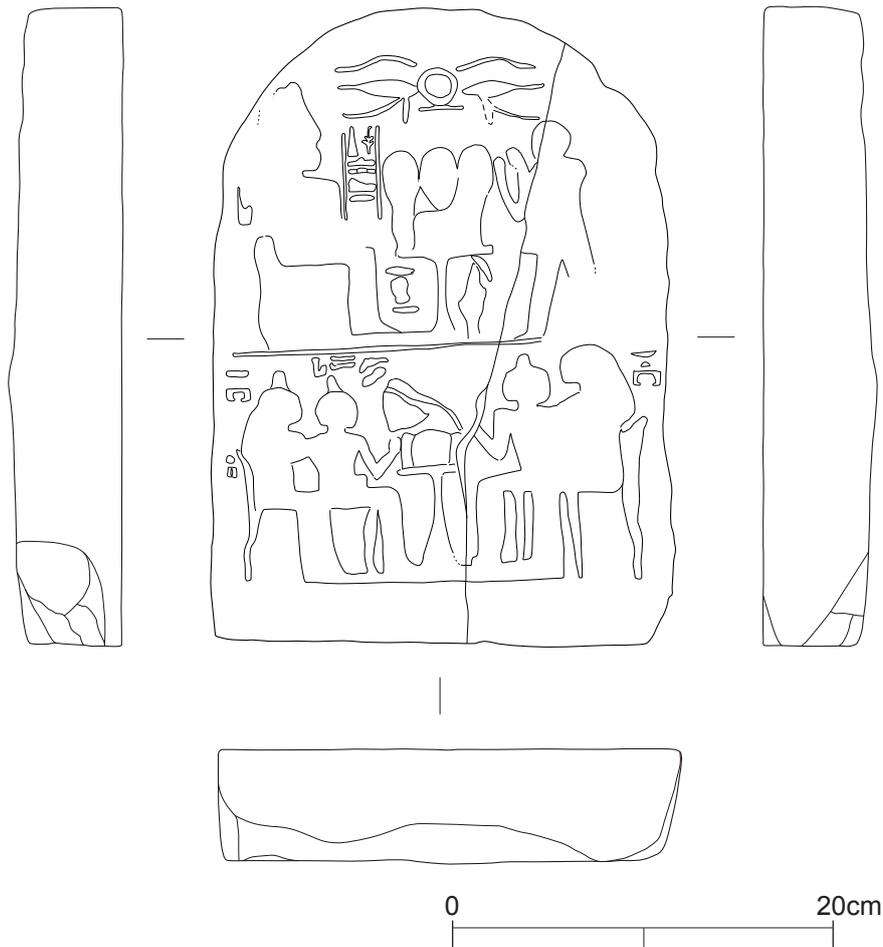


図4 シャフト125地上部出土石灰岩製ステラ
Fig.4 Limestone stela found at the above-ground area of Shaft 125

ラの頸部片（図3.6）が出土しており、周囲の地上部から出土した土器片と接合した。アンフォラは明らかに土壌よりも大きいため、土壌には完形品が納められたわけではなく、当初から土器片の状態で見納されていたことになる。

シャフト125の北側では、砂礫による表層を取り除いたところ、6基のシャフト墓の開口部が発見された（シャフト126～130）。これらのシャフトについては開口部の平面を確認するために上部だけを発掘しており、地下の発掘は第22次調査では行わなかった。

3. シャフト125の調査

シャフト125開口部の平面は南北1.0m、東西2.1mで、シャフト上部には板状の石灰岩による枠の一部が北面のみ発見された（図5、6）。シャフト部の深さは5.6mで、シャフト部の床面よりも一段高い位置から東西に部屋が造られていた。西側入ってすぐの部屋（A室）は平面が南北3.0m、東西2.7mで、天井高が2.0mであった。A室の西側と南側にもさらに部屋が穿たれていた。西側のB室は平面が南北2.5m、東西2.0mで、天井高が1.6mであった。B室床面のほぼ全体が約1.0m掘り下げられており、モルタルでつなぎ合わされた石灰岩の板が掘り下げ部分の壁を覆っていた。石灰岩の板による南北方向の間仕切りが周囲の石灰岩の板と同じ高さで置かれており、2つの埋葬のための空間が設けられていた。これらの上に石灰岩の蓋が架けられ

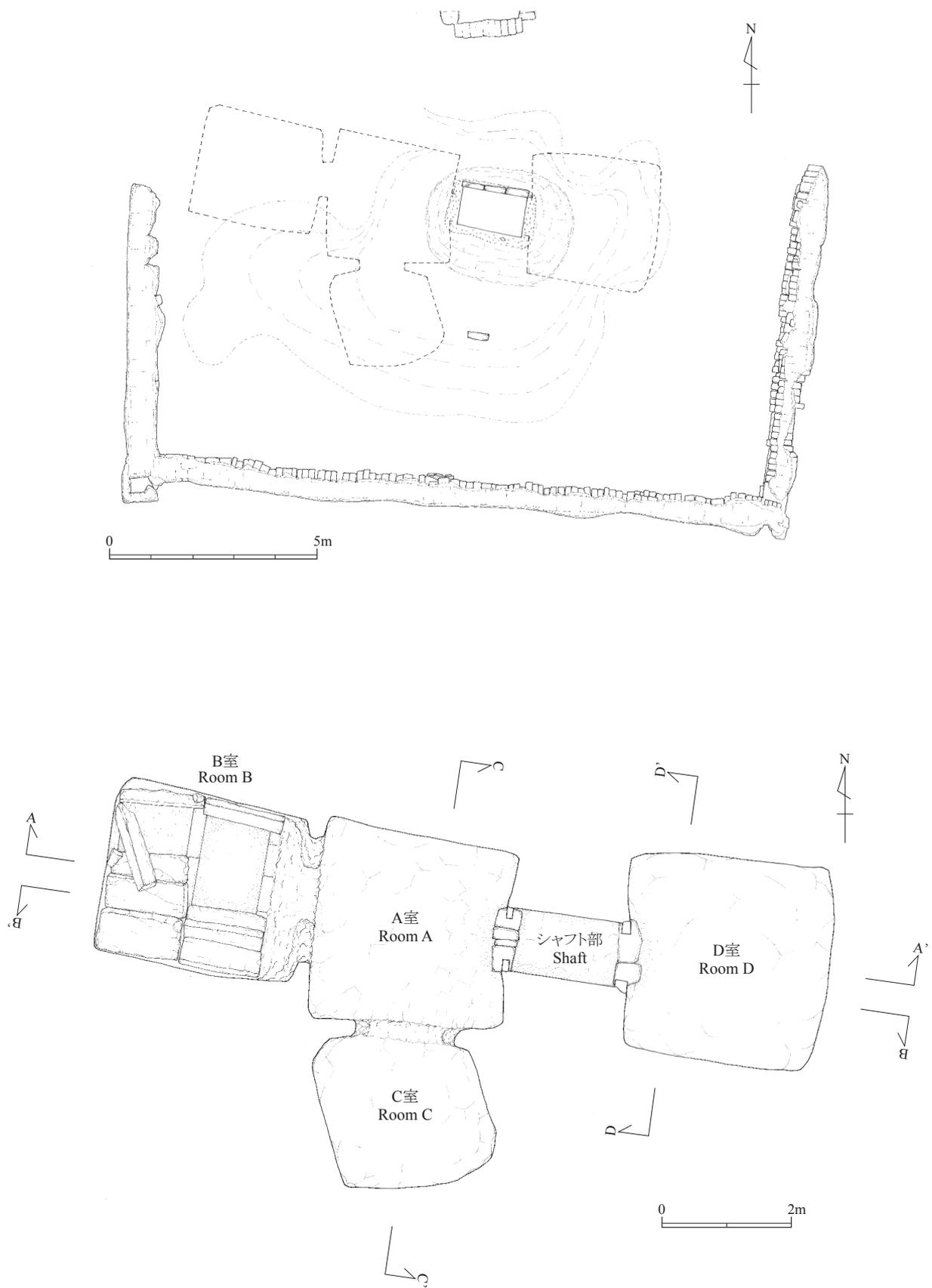
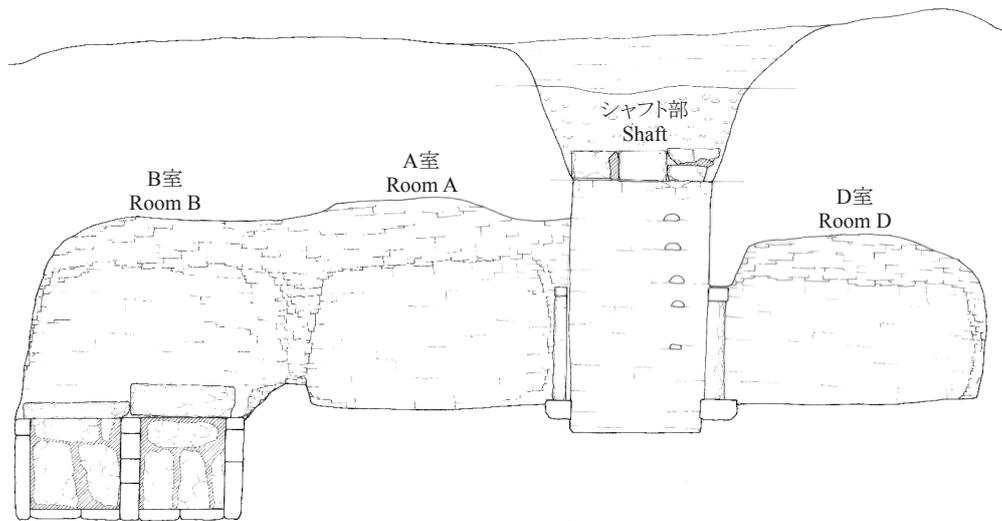
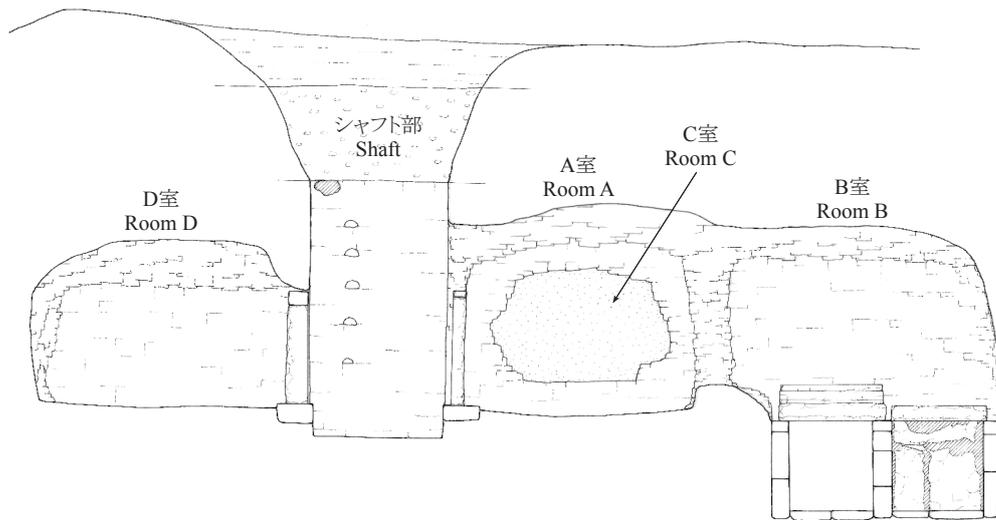


図5 シャフト 125 平面図

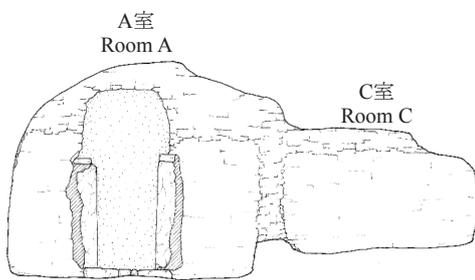
Fig.5 Plan of Shaft 125



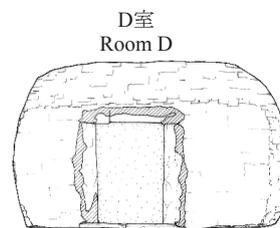
Section A-A'



Section B-B'



Section C-C'



Section D-D'



図6 シャフト125断面図
Fig.6 Section of Shaft 125

ていたようで、蓋の南側部分の板が残っていた。こうした石棺のような遺構はダハシュール北遺跡ではパシエドゥのトゥーム・チャベルの地下室で発見されており（吉村他 2002: 94, 図 6; 小岩他 2003: 224, 図 4, 5）、サッカーでもティアとティアの墓で見られる（Martin 1997: 12-13, Pl.6）。A 室の南側に付随する C 室の平面は南北 2.5 m、東西 2.4 m で天井高が 1.0 m であり、C 室の床面は A 室よりも一段高い位置にある。シャフト部から東側に造られた D 室は平面が南北 3.2 m、東西 3.3 m の方形で、天井高が 1.4 m である。シャフト部から A 室、D 室への入口部分には石灰岩の脇柱が両端にあり、D 室では石灰岩のまぐさが架けられていた。

地下室の内部には天井から崩落したと考えられるタフラ塊が全体に散乱しており、A 室、D 室にはその下にシャフト部から流入したと考えられる細砂が堆積していた。内部はすでに盗掘を受け攪乱されていたが、木棺片と大量の木製シャブティ、木製シャブティ・ボックス、エジプシャン・アラバスター製のカノポス壺、木製のカノポス壺、カノポス壺を納めた木製の箱を構成していたと考えられる断片、スカラベ、ファイアンス製のペクトラル、象牙製の耳飾り、ビーズ、人骨、土器など多くの遺物が発見された。専門家による出土人骨の分析がまだ実施されていないため、実際に何人がこの墓に埋葬されていたかはまだ明らかではないが、木製シャブティの碑文から少なくとも 8 名の被葬者の名前が確認できた。木製の遺物の状態は極めて悪く、パラロイド B72 による強化処理を施しながら取り上げを行った。

4. シャフト 125 出土遺物

(1) カノポス壺・箱

エジプシャン・アラバスター製のカノポス壺の蓋部が 4 点発見された。ヒヒの頭部のもの（ハピ）が 2 点（図 7.1、7.2）、人間の頭部のもの（イムセティ）が 2 点（図 7.3、7.4）であり、この内図 7.1 のみシャフト部から発見され、残りは全て D 室から出土した。細部は主に黒色の線で描かれ、所々に水色、赤褐色、黄色による彩色の痕跡が残っている。サッカーのホルエムヘブ墓で類似するヒヒのカノポス壺の蓋が発見されており、第 19 王朝に年代づけられている（Schneider 1996: 26, Pl.16.123）。

B 室南東コーナー付近のタフラの堆積から、木製カノポス壺の蓋部 2 点がまとまって出土した。図 7.5 はジャッカルの頭部（ドゥアムテフ）、図 7.6 はハヤブサの頭部（ケベフセヌエフ）を象ったもので、両者とも全面が黒色の樹脂で覆われ、黄色で細部が描かれていた。形状、彩色ともに類似している例は本遺跡のシャフト 110 からも出土しており、この埋葬は第 20 王朝に年代づけられている（吉村他 2012: 47, 49, 図 18）。また B 室の東側石棺の内部からもカノポス壺の容器部分と考えられる木製の円筒形の断片が出土した。半円の筒状の断片を 2 つ合わせて円筒形にしたもので、同様に全面が黒色の樹脂で覆われ黄色で碑文が書かれていた。碑文には「アメンエムヘブ」の名前があり、後述するように同じ名前を持つシャブティが複数出土している。

カノポス壺を収めていた箱と思われる断片も出土した。A 室からは箱の蓋と思われる長方形の板が出土しており、上面が黒色で塗られ、黄色で 2 条の碑文が書かれていた（図 9）。碑文には被葬者の名前「アメンエムヘブ」があり、2 条の碑文の間、ちょうど中間に 3 カ所だぼ穴が並んでいた。同じ A 室から伏せたジャッカルの象ったと考えられる木製の彫像（図 10）が出土しており、その下面にはほぼ同じサイズのだぼ穴があったことから、おそらく蓋の上にはジャッカルの彫像が載せられていたと推測される。彫像も黒色を背景に黄色で細部が描写されていた。また、木製の箱の上部と思われる、軒蛇腹を表現した断片も A 室から出土している。軒蛇腹や伏せたジャッカルの彫像を持つカノポス壺の箱は新王国時代末に見られる特徴で、ヘリホルの妻ネジェメトの例も同様の構成を持つ（Dodson 1994: 76, 78, Pl.XXXI.b）⁴⁾。また、D 室の北東コーナー付近からはカノポス壺の箱が載せられていたと推測される櫓が発見された（図 11）。平面の大きさは 69.5 x



図7 シャフト 125 出土カノポス壺
Fig.7 Canopic jars from Shaft 125

55.5 cm、床面の直上から発見されていること、また側面がD室東壁とほぼ平行であることから、原位置である可能性が高い。

(2) 木棺

木棺は人型と箱型のものがあり、ほとんどが断片のみだったが、人型については少なくとも3つのタイプがあることが確認できた。1つ目は全体が黒色の樹脂で覆われ、黄色で細部が表現されたものであり、このタイプが多くを占めている。2つ目は黄色を背景に碑文が多彩色で書かれたもので、蓋のつま先にあたる部分がA室から出土した。3つ目は生前の着衣の姿で表現されたもので、このタイプの特徴である裸足の断片と、足部分が載せられていたと考えられる蓋のつま先の断片がD室から出土した。D室入口付近からは木



図 8 シャフト 125 出土木製カノポス壺
Fig.8 Wooden canopic jar from Shaft 125



図 9 シャフト 125 出土木製カノポス箱の蓋
Fig.9 Lid of wooden canopic chest from Shaft 125

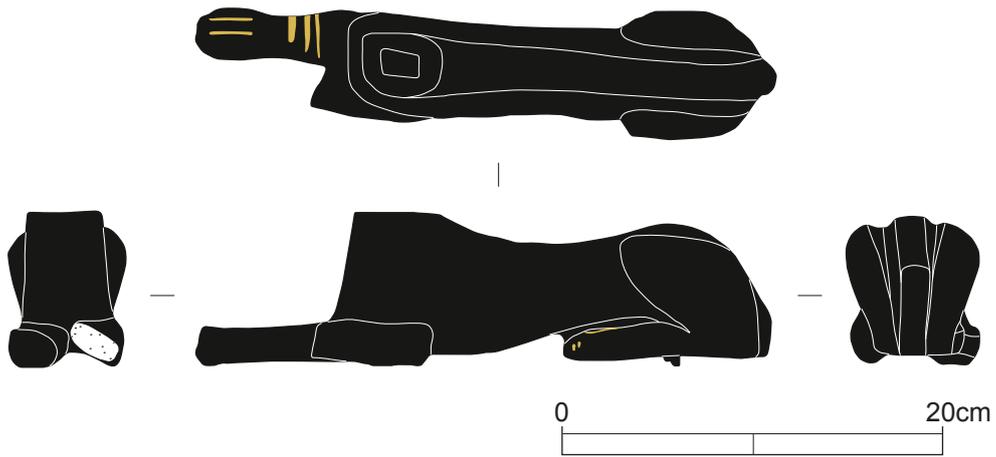


図 10 シャフト 125 出土木製彫像
Fig.10 Possible wooden recumbent jackal surmounted on a lid of canopic chest from Shaft 125



図11 シャフト125D室出土木製櫓
Fig.11 Wooden sledge of canopic chest from Room D of Shaft 125

棺の身部分の底が出土した。側面もわずかに残っていたが、極めて状態が悪かった。全長が1.2mほどであり、子どもの埋葬であったと考えられる。箱型についてはA室から出土した子どもの埋葬と思われる小型のものがあり、特に装飾などは見られなかった。

(3) シャブティとシャブティ・ボックス

木製のシャブティは全ての部屋で出土しており、特にA室で多く見られた。シャブティのタイプは大きく分けて4つあった。1つ目は黒色を背景に黄色で碑文や細部が描かれたもので(図12、13.1)、このタイプが多数を占めていた。2つ目は黄色を背景に黒色で鬘や碑文、細部が表現されたもの(図13.2)、黄色を背景に細部が黒色で描かれ、碑文がないもの(図13.3)、背景が白色で碑文や細部が黒色、赤褐色、黄色で描かれたもの(図13.4)である。どのタイプでも、キルトを纏った形のシャブティ⁵⁾が含まれていた。シャブティから明らかになった被葬者の名前は、アメンエムヘブ(図13.1)、カエムイペト(図12.1)、ネヘト(図12.2)、イシスネフェルト(図12.3、4)、ケチュ(図13.3)、ホリ(図13.4)、クイなどがあつた⁶⁾。この他にも、「ネフェル」ではじまり続きが判別できない名前のシャブティが見つかっている。全面が黒色の樹脂で覆われたシャブティは第19王朝に一般的とされており(Schneider 1977: 239-240)、サッカラで出土した例も第19王朝に年代付けられている(Martin 1997: 70, Pl.173.35; Martin et al. 2001: 40, Pl.77, cat.28-c, g, r)。一方、第20王朝に年代付けられる本遺跡のシャフト110の埋葬でも同様の装飾を持つものが多数出土している(吉村他 2012: 46-49)。図13.4のように白を背景に赤色の帯の装飾が施されたものは、H. シュナイダーの集成では第19王朝に年代付けられたものがある(Schneider 1977: 3.1.2.4)。この他、陶製のシャブティの断片も2点出土した。

木製のシャブティ・ボックスも出土しており、発見された時にはまだシャブティが中に残っているものも

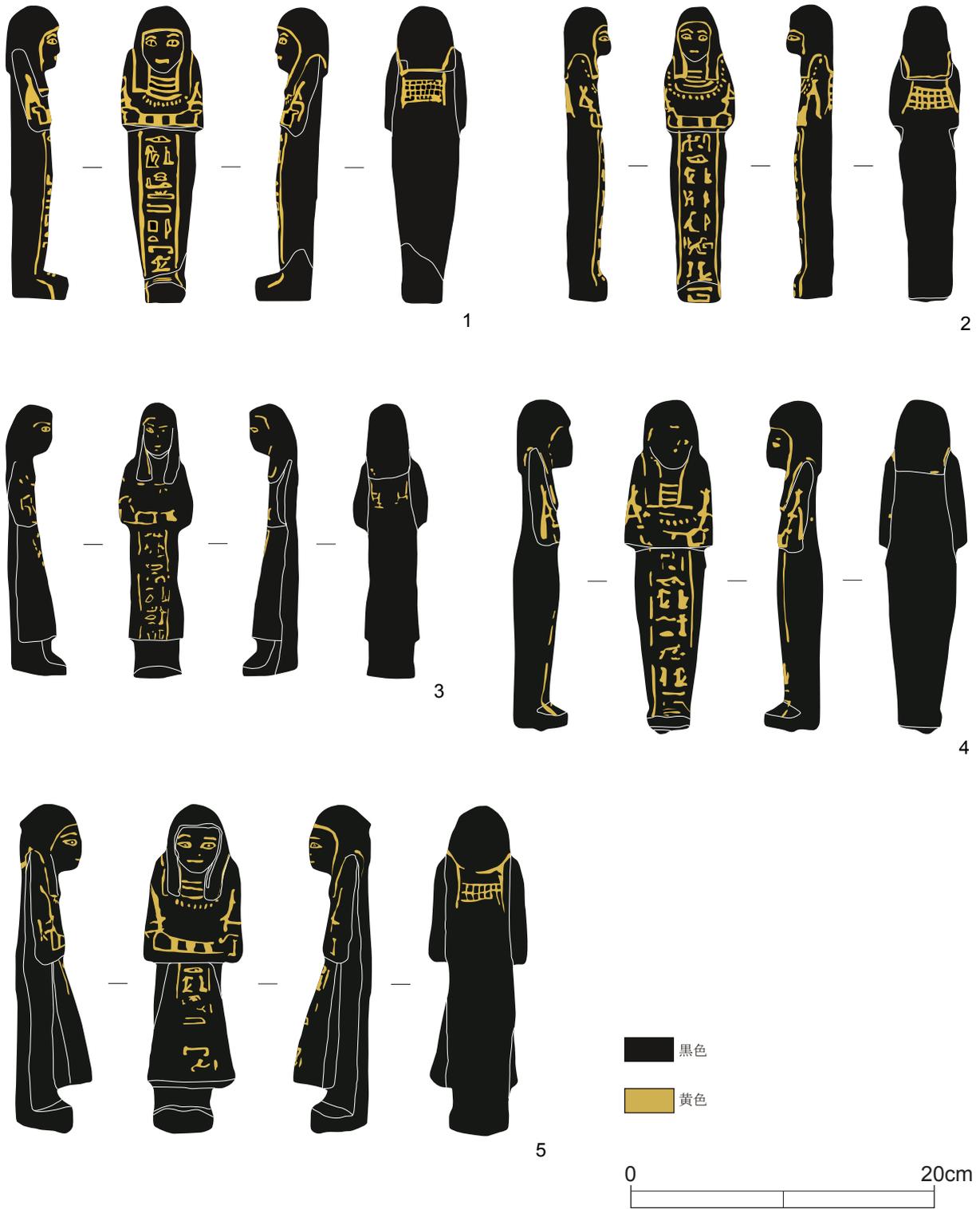


図12 シャフト125出土木製シャブティ(1)
Fig.12 Wooden shabtis from Shaft 125 (1)

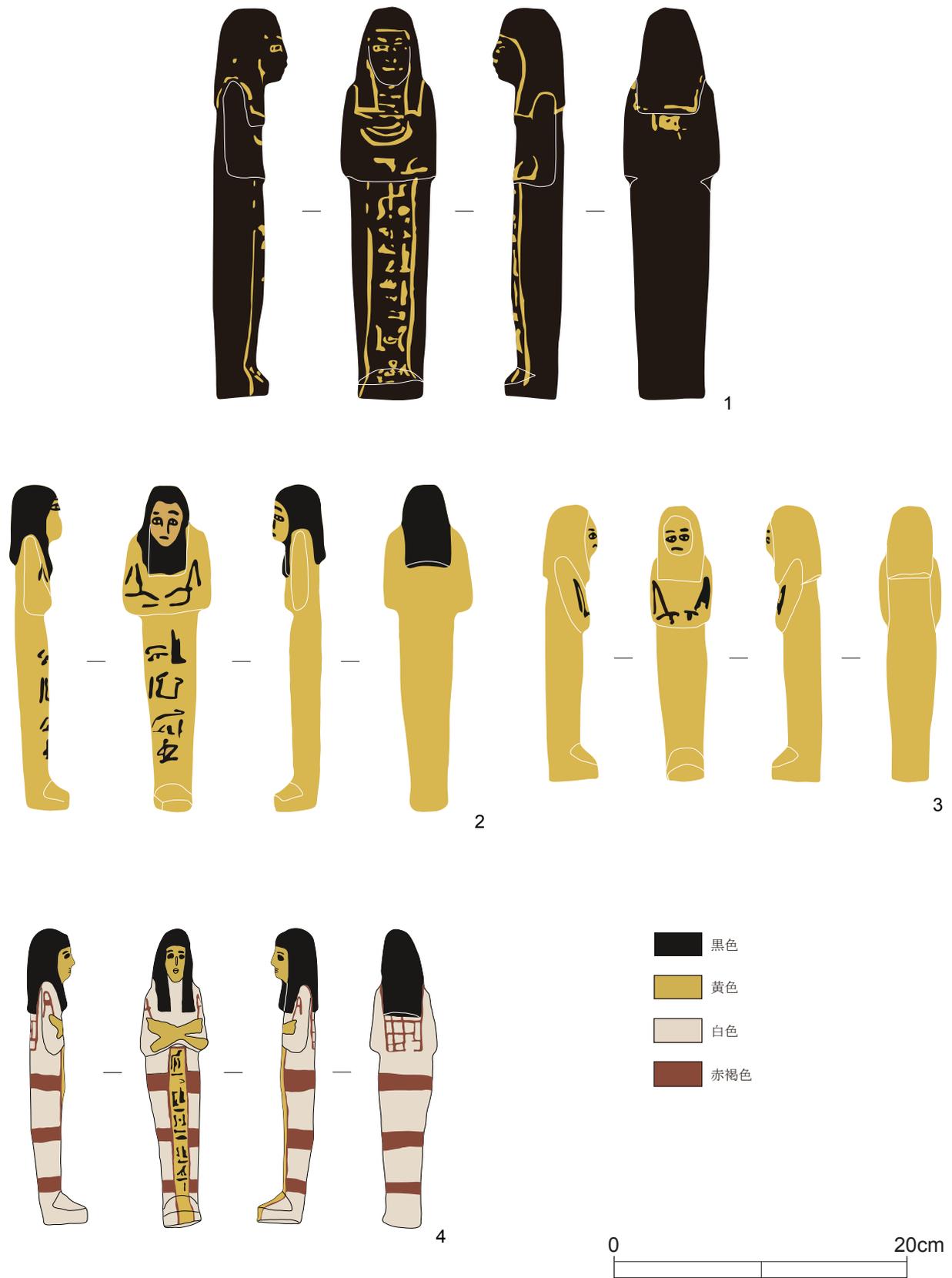


図13 シャフト125出土木製シャブティ (2)
 Fig.13 Wooden shabtis from Shaft 125 (2)



図 14 シャフト 125A 室出土木製シャブティ・ボックス
Fig.14 Wooden shabti box from Room A of Shaft 125



図 15 シャフト 125B 室出土木製シャブティ・ボックス
Fig.15 Wooden shabti box from Room B of Shaft 125

あった。図14はA室の入口付近で発見されたもので、黄色を基調に碑文、図像が多彩色で描かれており、向かって右側にはヴォールト形の蓋が残っていた。蓋の幅から見て、本来は仕切りを挟んで3つのヴォールト形の蓋が並んでいたと考えられる。長手方向の側面に描かれた図像の全体像は不明瞭だが、出土した別の断片から右側に座っている人物（神）が描かれ、左側に礼拝のポーズをとった人物が描かれていたことがわかった。右側上部には「オシリス」の文字があり、おそらく被葬者の名前が続いていたと考えられる。短手方向の側面には、立っている女神の胸から下の部分の図像が残っていた。このボックスの中には、先に述べた黄色を背景に細部が黒色で描かれ、碑文のないタイプのシャブティが6体残っていた。このシャブティ・ボックスは、D. アストンによる分類の Type IV に該当すると考えられ、このタイプは第19王朝後期から第20王朝に年代づけられている（Aston 1994: 25-27）。図15はB室の東側石棺の底で、床に積もったタフラの上から発見された。上部は失われていたが、残存していた長手方向の側面には黒色を背景に黄色で図像が描かれており、供物卓を挟んで右側に坐しているオシリス神、左側にキルトを着て礼拝のポーズをとっている人物が描かれていた。死者がオシリス神に対して礼拝するモチーフのシャブティ・ボックスは第19王朝後期から第21王朝末にあり、とくに第20王朝に多いとされている（Aston 1994: 39, Pl.7.2）。D室からはクイのシャブティ・ボックスが発見された。見つかった地点にはクイのシャブティが集まっていたため、シャブティが入ったまま土中であつたと考えられるが、側面は朽ちており、図像などは確認できなかった。

(4) ファイアンス製スカラベ

ファイアンス製のスカラベがD室から発見された（図16）。図16.1は類似する例がグラーブ遺跡の新王国時代の墓から多数発見されており（Brunton and Engelbach 1927: Pl.25.1, 27.6, 29.3-5, 29.28, 40.29, 41.65, 41.102）、サッカラにも類例が認められる（Raven 2001: 30, Pl.15, cat.78）。図16.2はネブとマアト、図16.3はハヤブサが2頭のcobraに挟まれた図像であつた。

(5) 装身具

多くのビーズがA室とD室から発見されており、主な例を図17に載せた。図17.11はカーネリアン製、図17.15もカーネリアン製で一部に金が被せられており、おそらく指輪の一部だったと考えられる。それ以外は全てガラス製である。図17.14は“eye-bead”と呼ばれているもので、同様の文様を持つものはグラーブ遺跡の新王国時代の墓からも出土している（Brunton and Engelbach 1927: XLIII.58c）。

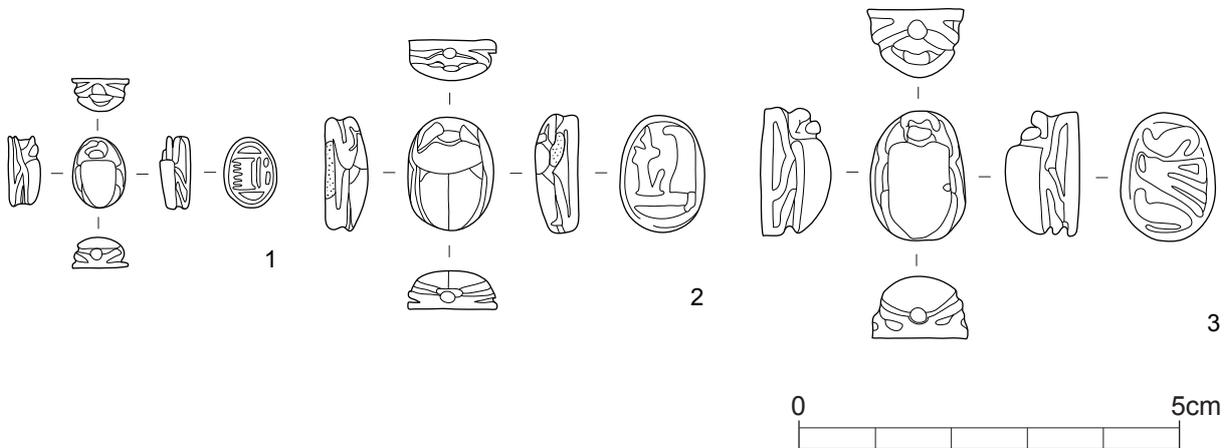


図16 シャフト125D室出土ファイアンス製スカラベ
Fig.16 Faience scarabs from Room D of Shaft 125

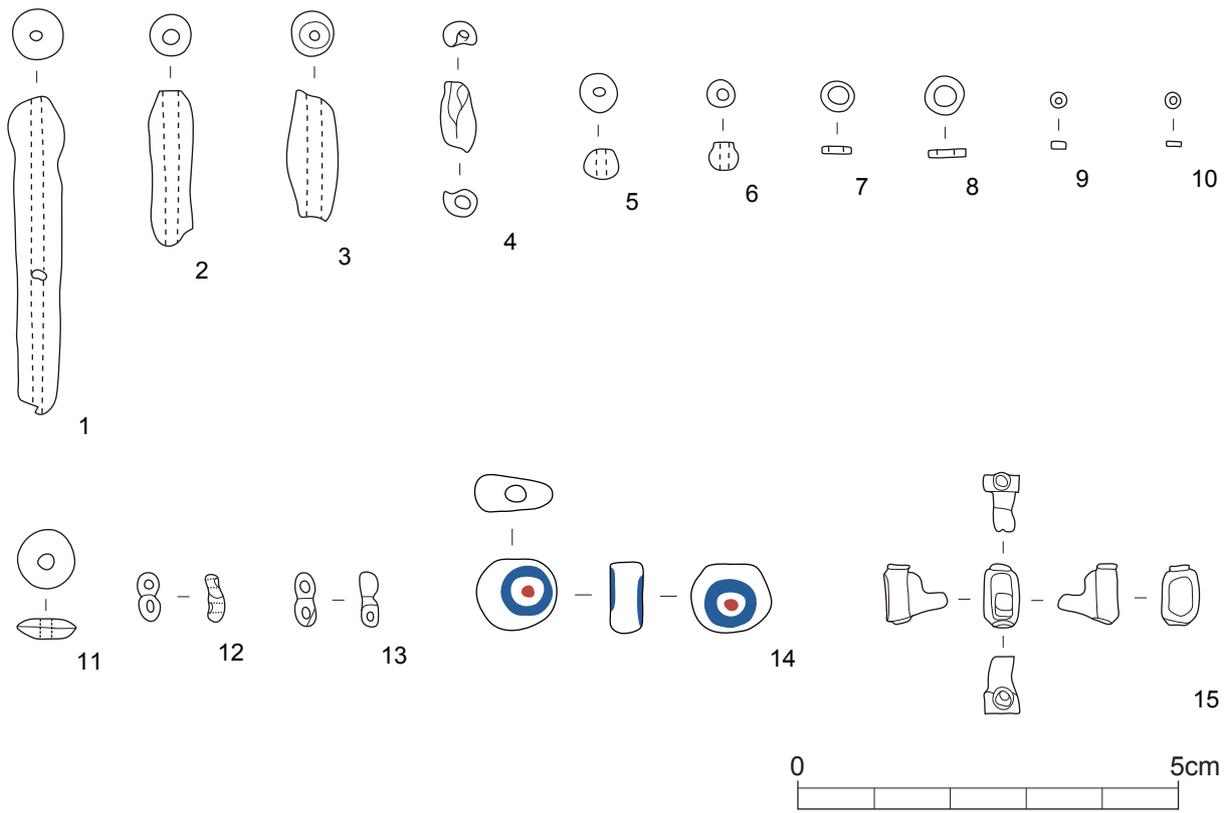


図17 シャフト125出土ビーズ
Fig.17 Beads from Shaft 125

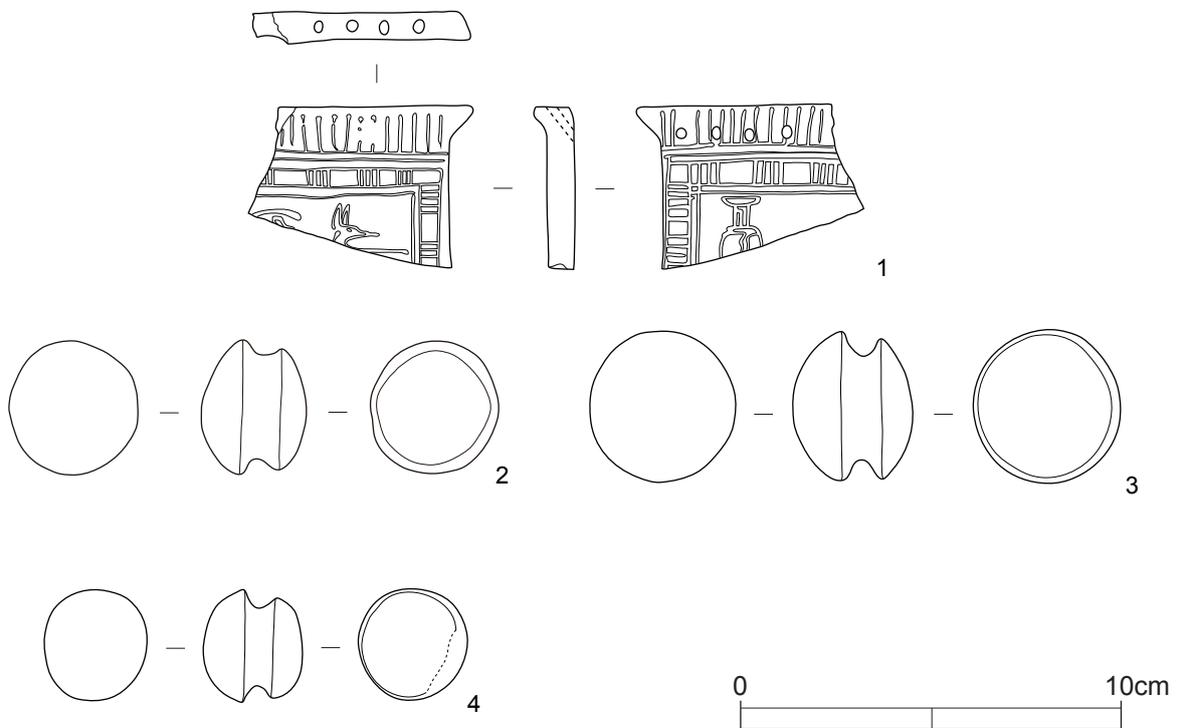


図18 シャフト125出土ペクトラル、耳飾り
Fig.18 Faience pectral and ear-stud from Shaft 125

図 18.1 は祠堂形のファイアンス製ペクトラルの断片で、上部には軒蛇腹が表現され、吊り下げのための穿孔が4か所認められる。表面に伏せたジャッカル、裏面にネフティスの描写が見られる。ネフティスの反対側にはおそらくイシスが描かれ、その間にスカラベが配されていたと推測される (Feucht 1971: cat.66, 67, 75)。図 18.2-4 は ear-plug あるいは ear-stud と呼ばれる牙製耳飾りで、耳朶に穴を開けてはめ込まれたものと考えられている⁷⁾。類例はサッカラでも発見されており、第 19 王朝から第 20 王朝に年代づけられている (Raven et al. 2011: 94, cat.71)。

(6) 土器

図 19 はシャフト 125 の地下から出土した土器の主な例である。図 19.4 は新王国時代の「ビール壺」と呼ばれている器形で、A 室と D 室で出土した断片が接合したものであり、B. アストンの分類による Type III.2 に該当すると考えられ、第 19 王朝後半から第 20 王朝に年代付けられている (Aston 2011: 218-219, Fig. VI.11)。図 19.8 は双耳の把手と注口を持つミケーネの「あぶみ壺 (stirrup jar)」で、A 室から出土した。横方向の幅広の線、頂部の渦巻き状の様子が赤褐色で彩色されており、把手と注口の一部にも彩色がある。ミケーネの後期ヘラディック III B1 期に特徴的な器形、彩色であり、類似する例がサッカラのラモーゼ墓からも出土している (Hankey and Aston 1995: 77, Fig.4.7, Pl.4.9)。図 19.9 は D 室から出土したほぼ完形のアンフォラで、白色プラスタ塊によって封がなされていた。D. アストンによるアンフォラ研究では Marl D の Type B2 に近く、ラムセス 2 世治世からセトナクトまたはラムセス 3 世治世に年代付けられている (Aston 2004: 191-193, Fig.8.a)。

5. おわりに

シャフト 125 の地下室から出土した遺物の年代は、新王国時代第 19 王朝を示すものもあれば第 20 王朝のもの、あるいは両者にまたがっているものもあった。シャブティの名前から多くの被葬者がいたと考えられ、この墓が第 19～20 王朝をまたぐ一定の期間継続的に使用されていた可能性も否定できない。エジプシャン・アラバスター製のカノポス壺やスカラベが出土したのは東側の D 室で、西側の A、B、C 室からは一切なく、出土傾向が異なることも注目に値する。しかし一方で同じ名前を持つシャブティが A 室と D 室の両方から出土していることや、A 室と D 室の両方から出土した土器片が接合している個体があるなど、激しく攪乱を受けている様子も看取され、副葬品の本来の位置関係を判別しづらいという状況もあり、こうした出土傾向における差異について明確な説明を与えることは現状では難しい。

出土遺物の組成で特筆すべき点は、黒色で全面が覆われ、黄色で装飾や碑文が描かれていた遺物が大半を占めるということである。これらは棺、シャブティ、カノポス壺およびそれらを収める箱であり、木製である点、埋葬のために特別に作られたものである点で共通している。本遺跡のシャフト 110 からは、同様に棺、シャブティとその箱、カノポス壺が黒色を背景に黄色で装飾された遺物で構成された埋葬が発見されており、第 20 王朝に年代付けられている (吉村他 2012)。黒色を背景とする棺はハトシェプスト女王またはトトメス 3 世治世から出現し、長くてラムセス 2 世まで続くとしている記述が多く見られるが (Niwinski 1984, 1988: 11, 1996; Dodson 1998: 336, note 31, 32; Ikram and Dodson 1998: 210-215; Taylor 1989: 32-34; Taylor 2001: 168)、サッカラのイウルデフ墓から出土した黒色の木棺はラムセス朝後期のものである可能性が指摘されている (Raven 1991: 23, note.63)。棺の装飾の変遷はメンフィス地域では様相が異なり、第 20 王朝に至るまで黒色の木棺が使用されていた可能性があり、ダハシュール北遺跡の過去の成果はそれを裏付けている。さらに、シャフト 110 と今回のシャフト 125 の成果から、棺だけでなく他の埋葬に特化した副葬品につ

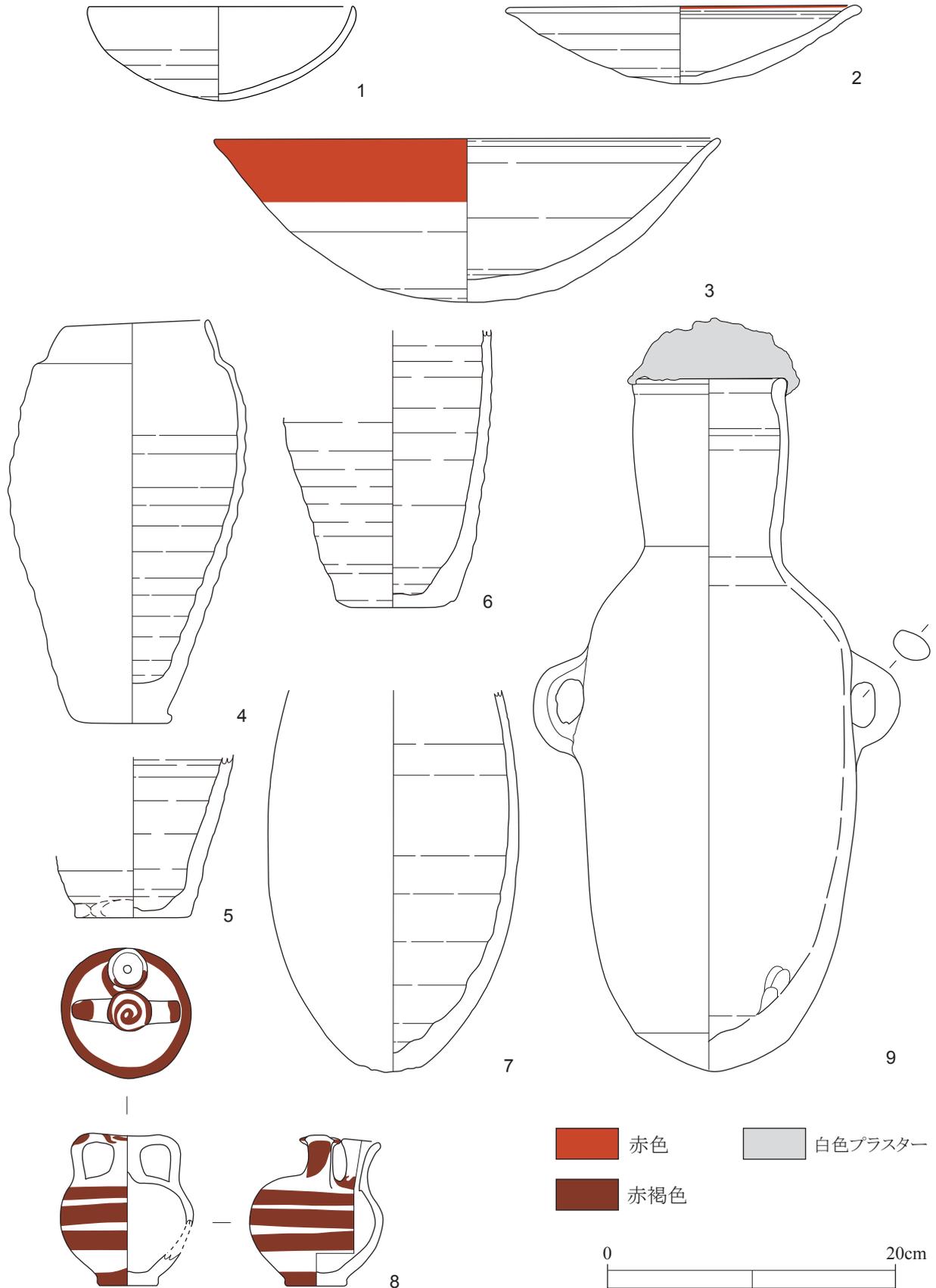


図19 シャフト125出土土器
Fig.19 Pottery vessels from Shaft 125

いても同じ装飾で統一するという習慣があった可能性が指摘できる。このような副葬品の組成は当時の政治的・宗教的センターであったテーベでは見られず、サッカラ、ダハシュールを含むメンフィス地域独自の葬制の存在を示唆するものとして、重要な成果であると考えられる。

謝辞

本調査は、日本学術振興会科学研究費基盤研究（A）「葬制から見た古代エジプト文明の変化とその社会的背景に関する学際的研究」（研究代表者：吉村作治、課題番号：26257010）の助成を受けて実施された。エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古大臣マムドゥーフ・アル＝ダマディ閣下（博士）、外国調査隊管轄事務局長ムハンマド・イスマイル博士、サッカラ査察局長アラ・アル＝シャハータ氏、同副局長サブリ・ファラグ氏、チーフ・インスペクターのムハンマド・ユーセフ氏およびハムディ・アミン氏、サッカラのセリーム・ハッサン遺物収蔵庫の館長ラガブ・トゥルキ氏、第22次調査の査察官アハマド・ズィクリ氏に多大なご支援、ご協力をいただいた（肩書きは調査時のもの）。

ここに記して感謝の意を表したい。

註

- 1) リモートセンシングを応用したダハシュール北遺跡の発見については早稲田大学エジプト学研究所 2003 を参照。第1次から第13次調査にかけての発掘調査の概要と文献については吉村 2011 にまとめられている。以降の調査は、第14次（吉村、近藤、長谷川他 2011）、第15次（吉村、近藤、矢澤他 2011）、第16・17次（吉村他 2012）、第18次（吉村他 2013）、第19次（吉村他 2014）となっている。第20・21次は倉庫における遺物整理調査であったため、概要報告はない。中王国時代の埋葬については Baba and Yoshimura 2010, 2011, Baba 2014, Baba and Yazawa 2015 にまとめられている。
- 2) 第22次調査の隊員構成は次の通りである。隊長：吉村作治、現場主任：矢澤健、考古学班：近藤二郎、竹野内恵太、山崎世理愛、石崎野々花、建築学班：柏木裕之、広報：岩出まゆみ、渉外：吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
- 3) 胎土の分類はウィーン・システムに準拠している（Nordström and Bourriau 1993: 168-182）。以降の土器の胎土に関する記述も同様である。
- 4) ネジェムトのカノボス壺の箱は多彩色であり、外面の装飾という点では異なる（Dodson 1994: Pl.XXXI.b）。
- 5) 1人の被葬者に対するシャブティの数は19王朝初期には10体にまで増え、19王朝から20王朝、特に後者の時期にさらに増加していき、シャブティのグループのリーダーが含まれるようになる（Schneider 1977: I, 267）。キルトを纏ったシャブティはこのリーダーを表している。リーダーの存在は、シャフト125の被葬者が1人10体以上のシャブティを有していた可能性を示唆している。シャブティの全個体数の集計は完了していないが、優に300体は超える数があることは確実である。
- 6) 発見された人名は全て H. ランケの集成（Ranke 1935-1952）にもある。アメンエムヘブ：I, 28.14、カエムイペト：I, 263.18、ネヘト：I, 206.22、イシスネフェルト：I, 4.7、ケチュ：I, 341.31、ホリ：I, 251.17、クイ：I, 267.13。
- 7) 糸巻きと記述されている場合もあるが、女性のミイラの耳朶に大きな穴がけられていた例や、アメンヘテプ3世時代の彫像、レリーフや壁画などにこのタイプの耳飾りと思われる表現があることから、耳飾りとして使用されていたと考えられている（Freed 1982: 231-232）。

参考文献

Aston, B.

- 2011 “Chapter VI The Pottery”, in Raven, M. J., Verschoor, V., Vugts, M. and Walsem, v. R., *The Memphite tomb of Horemheb V: The Forecourt and the Area South of the Tomb with Some Notes on the Tomb of Tia*, Turnhout, pp.191-303.

Aston, D.A.

- 1994 “The shabti box: a typological study”, *Oudheidkundige Mededelingen uit het Rijksmuseum van Oudheden te Leiden* 74, pp.21-47.
- 2004 “Amphorae in New Kingdom Egypt”, *Ägypten und Levante* XIV, pp.175-213.

- Baba, M.
 2014 “Intact Middle Kingdom Burial of Senu found at Dahshur North”, in Kondo, J. (ed.), *Quest for the Dream of the Pharaohs: Studies in Honour of Sakuji Yoshimura*, Cairo, pp.35-48.
- Baba, M. and Yazawa, K.
 2015 “Burial Assemblage of the Late Middle Kingdom shaft-tombs in Dahshur North”, in: Grajetzki, W. and Miniaci, G. (eds.), *The World of Middle Kingdom Egypt*, Middle Kingdom Studies 1, London, 1-24.
- Baba, M. and Yoshimura, S.
 2010 “Dahshur North : Intact Middle and New Kingdom Coffins”, *Egyptian Archaeology* 37 (Autumn), pp.9-12.
 2011 “Ritual Activities in Middle Kingdom Egypt: A View from Intact Tombs Discovered at Dahshur North”, Bárta, M., Coppens, F., Krejci, J. (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2010*, vol.1, Prague, 158-170.
- Bresciani, E.
 1985 *Le stele egiziane del Museo civico archeologico di Bologna*, Bologna.
- Brunton, G. and Engelbach, R.
 1927 *Gurob*, London.
- Dodson, A. M.
 1994 *The Canopic Equipment of the Kings of Egypt*, London.
 1998 “On the burial of Maihirpri and certain coffins of the eighteenth dynasty”, in Eyre, C.J. (ed.), *Proceedings of the 7th International Congress of Egyptologists, Cambridge, 3-9 September 1995*, Leuven, pp.331-338.
- Feucht, E.
 1971 *Pektorale nichtköniglicher Personen*, Ägyptologische Abhandlungen 22, Wiesbaden.
- Freed, R.E.
 1982 *Egypt's Golden Age: The Art of Living in the New Kingdom 1558-1085 B.C.- Catalogue of the Exhibition*, Boston.
- Hankey V. and Aston, D.
 1995 “Mycenaean Pottery at Saqqara: Finds from Excavations by the Egypt Exploration Society of London and the Rijksmuseum van Oudheden, Leiden, 1975-1990”, in Carter, J. B. and Morris, S. P. (eds.), *The Ages of Homer: A Tribute to Emily Townsend Vermeule*, Austin, pp.67-91.
- Ikram, S. and Dodson, A. M.
 1998 *The Mummy in Ancient Egypt: equipping the dead for eternity*, London.
- Martin, G. T.
 1997 *The tomb of Tia and Tia: a Royal Monument of the Ramesside Period in the Memphite Necropolis*, London.
- Martin, G. T., Dijk, J. v., Raven, M. J., Aston, B. G., Aston, D. A., Strouhal, E. Horáčková, L., Schneider, H. D. and Walsem, R. v.
 2001 *The Tombs of Three Memphite Officials: Ramose, Khay and Pabes*, London.
- Niwinski, A.
 1984 “Sarg NR-SpZt,” *Lexikon der Ägyptologie* V, Wiesbaden, pp.434-468.
 1988 *21st Dynasty coffins from Thebes: Chronological and typological studies*, Mainz am Rhein.
 1996 “Coffins from the Tomb of Iurudef-A Reconsideration. The Problem of Some Crude Coffins from the Memphite area and Middle Egypt,” *Bibliotheca Orientalis* 53, pp.324-363.
- Nordström, H.A. and Bourriau, J.
 1993 “Ceramic Technology: Clay and Fabrics,” in Arnold, Do. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz, pp.143-190.
- Ranke, H.
 1935-1952 *Die altägyptischen Personennamen*, Band I-III, Glückstadt.
- Raven, M. J.
 1991 *The Tomb of Iurudef: a Memphite Official in the Reign of Ramesses II*, Leiden and London.
 2001 *The tomb of Maya and Meryt II*, Leiden and London.
- Raven, M. J., Verschoor, V., Vugts, M. and Walsem, v. R.
 2011 *The Memphite tomb of Horemheb V: The Forecourt and the Area South of the Tomb with Some Notes on the Tomb of Tia*, Turnhout.
- Schneider, H. D.
 1977 *Shabti : an introduction to the history of ancient Egyptian funerary statuettes, with a catalogue of the collection of Shabti in the National Museum of Antiquities at Leiden*, I-III, Leiden.
 1996 *The Memphite tomb of Horemheb II: A catalogue of the finds*, Leiden and London.
- Taylor, J.
 1989 *Egyptian coffins*, Aylesbury.

- 2001 “Patterns of colouring on ancient Egyptian coffins from the New Kingdom to the twenty-sixth dynasty: an overview”, in Davies, W. V. (ed.), *Colour and Painting in Ancient Egypt*, London, pp.164-181.
- 小岩正樹、吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、西本真一、中川武
2003 「エジプト・ダハシュール北部で発見されたパシェドゥの神殿型貴族墓」、『日本建築学会計画系論文集』第569巻、pp.223-230.
- 吉村作治
2011 「Ⅰ. はじめに」、『エジプト学研究』別冊第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.9-14.
- 吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川武、西本真一
2002 「エジプト ダハシュール北地区発掘調査報告—2001年 第7次調査—」、『早稲田大学人間科学研究』第15巻第1号、pp.91-106.
- 吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川武、西本真一、柏木裕之
1998 「エジプト ダハシュール北地区発掘調査報告—1997年 第1・2次調査—」、『早稲田大学人間科学研究』第11巻第1号、pp.109-120.
- 吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、矢澤健、柏木裕之、秋山淑子
2011 「Ⅱ. 第14次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.15-60.
- 吉村作治、近藤二郎、矢澤健、柏木裕之、秋山淑子
2011 「Ⅲ. 第15次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.61-83.
- 吉村作治、矢澤健、近藤二郎、馬場匡浩、西本真一、柏木裕之、秋山淑子
2012 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告—第16次・第17次発掘調査—」、『エジプト学研究』第18号、早稲田大学エジプト学会、pp.21-67.
- 吉村作治、矢澤健、近藤二郎、西本真一
2013 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告—第18次発掘調査—」、『エジプト学研究』第19号、早稲田大学エジプト学会、pp.15-43.
- 吉村作治、矢澤健、近藤二郎、西本真一、和田浩一郎
2014 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告—第19次発掘調査—」、『エジプト学研究』第20号、早稲田大学エジプト学会、pp.15-43.
- 早稲田大学エジプト学研究所 編
2003 『ダハシュール北〔Ⅰ〕—宇宙考古学からの出発—』、Akht Press.

エジプト学研究 第22号

2016年3月31日発行

発行所 / 日本エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.22

Published date: 31 March 2016

Published by The Japan Society of Egyptologist

1-104, Totsuka-cho, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Japan Society of Egyptologist